令和３年度　第２回考古学講座

神奈川県発掘調査成果発表会

2021

◆ 日　　時

令和３年７月31日（土）13：00 ～ 16：15　（開場 12：30 ～ ）

◆ 口頭発表

13：10 ～ 13：40　厚木市「三田林根遺跡第２地点」 —— 1
坪田　弘子（株式会社　玉川文化財研究所）

13：40 ～ 14：10　平塚市「諏訪前Ａ遺跡第16地点」 —— 3
土　任隆（国際文化財株式会社）

14：10 ～ 14：40　海老名市「河原口坊中遺跡第９次調査」 —— 5
石川　真紀（株式会社　玉川文化財研究所）

14：40 ～ 14：50　休憩（10分）

14：50 ～ 15：20　小田原市「久野山神下遺跡第Ⅸ地点」 —— 7
酒井　中（株式会社　パスコ）

15：20 ～ 15：50　大和市「新道遺跡」 —— 9
小山　裕之（株式会社　玉川文化財研究所）

15：50 ～ 16：05　質疑応答

◆ 紙上発表

平塚市「山王Ｂ遺跡第15地点・七ノ域遺跡第11地点」 —— 11
宇井　義典（大成エンジニアリング株式会社）

海老名市「河原口坊中遺跡第10次調査」 —— 13
竹内　順一（株式会社　パスコ）

藤沢市「川名仲丸遺跡」 —— 15
横山　太郎（有限会社吾妻考古学研究所）

会　場：かながわ労働プラザ　３階多目的ホール
主　催：神奈川県教育委員会　教育局　生涯学習部　文化遺産課
中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

縄文時代中期の大規模な集落の調査

三田林根遺跡（さんだはやしね） 第２地点

所 在 地 厚木市三田字林根 461 番５、461 番７、461 番８

調査期間 令和２年４月 21 日～令和２年８月 18 日

調査面積 469 ㎡

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担 当 者 坪田弘子・前川昭彦

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

調査概要　三田林根遺跡は、厚木市域の北東部に位置しており、地形的には中津川右岸の荻野台地東側縁辺部に立地しています。遺跡の東側には段丘崖が南北方向に延び、調査地点は台地の平坦面から緩斜面にあたります。

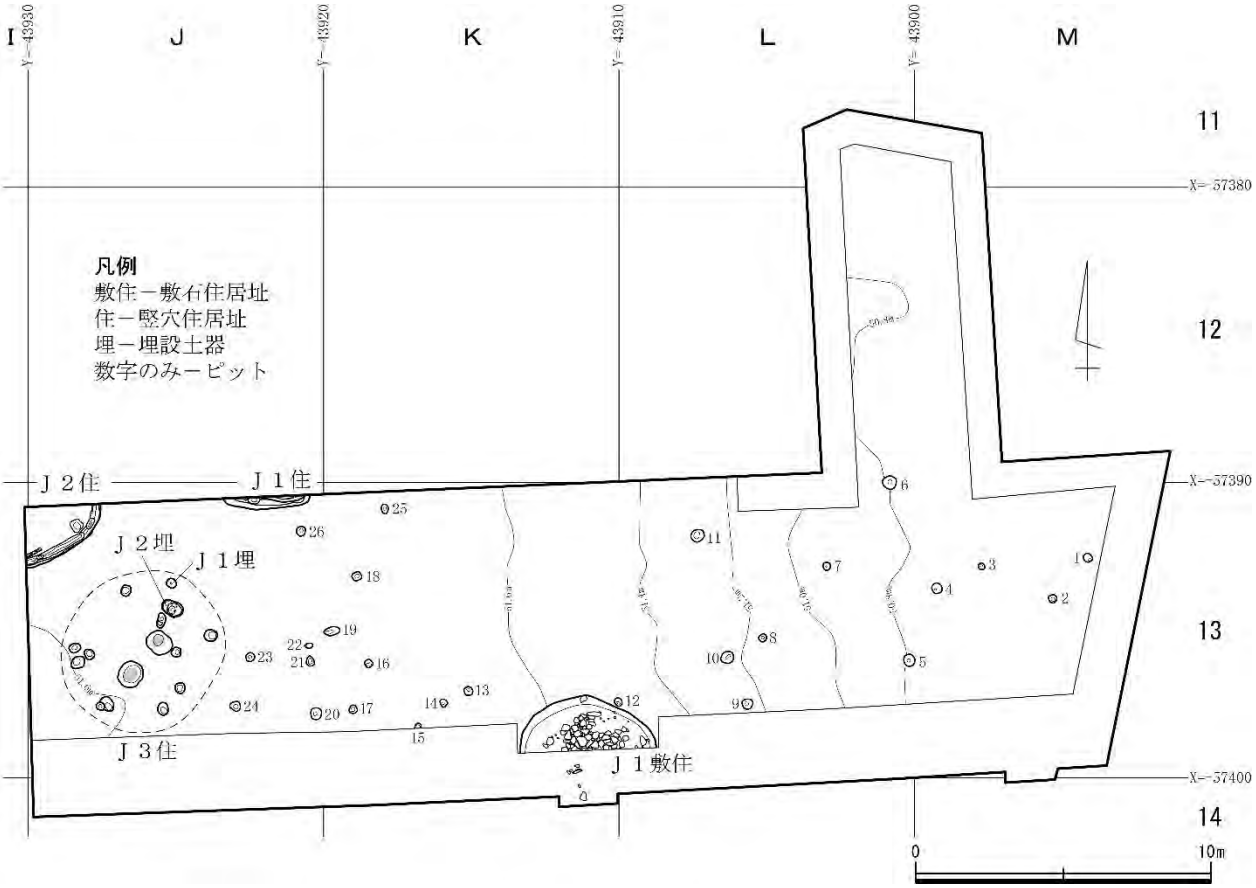
本地点の北西側隣接地では、2015 年度と 2018 年度に厚木市教育委員会の調査が行われました。縄文時代中期後半の竪穴住居址や土坑（どこう）群、配石（はいせき）などが多数検出され、拠点的な集落と推定されています（厚木市教育委員会　2020）。今回の調査では一連の遺構と考えられる縄文時代中期集落の一部が確認されました。

検出した縄文時代の遺構は、敷石（しきいし）住居址１軒、竪穴（たてあな）住居址３軒、埋設土器２基、ピット 26 基で、主に調査区西側の台地平坦面に分布し、東側の緩斜面にはピットが散在するのみで遺構の空白域が広がっていました。竪穴住居址と埋設土器の時期は縄文時代中期後半である加曽利（かそり）Ｅ３新式期、敷石住居址はそれに続く加曽利Ｅ４新式期で最も新しい遺構となります。調査区の制約から、この敷石住居址は炉址や張り出し部の有無を確認できませんでしたが、住居址中央部の床面に礫を面的に敷設するタイプと推定され、敷石直下からは埋納したと考えられる完形の小型磨製石斧が出土しています。出土遺物は中期前半～後期初頭の土器、土製品、石器で、出土量は遺物収納箱に換算して 54 箱を数え、縄文時代中期後半の加曽利E式と曽利（そり）式土器が主体となります。

縄文時代以外の遺構としては、中世・近世の溝状遺構１条、奈良・平安時代の溝状遺構１条と土坑６基を検出しましたが、これらに伴う遺物はほとんど出土せず詳細な時期は不明です。

まとめ　今回の調査区では、東側に住居址が展開しない状況から、集落居住域の南東側の限界を確認できました。集落の全体像がまだよくわからない中で、集落範囲を推定する上で重要な所見が得られたといえます。また、本遺跡で初となる敷石住居址の発見によって、三田林根遺跡も周辺地域の同時期に営まれた大規模集落と同様に、中期後半に盛行し、中期末に敷石住居址が出現した後に衰退していくという変遷をたどる可能性が出てきました。今後、予定されている隣接地の発掘調査が進むことで、本遺跡の集落構造や変遷が徐々に明らかになると期待されます。（坪田　弘子）

厚木市教育委員会 2020『縄文ムラ発見！－三田林根遺跡の調査から－』



第２図　縄文時代遺構分布図（1/300）

Ｊ１号敷石住居址調査風景（北から）

相模国府推定域の北端における縄文～近世の遺跡の調査

諏訪前（すわまえ）Ａ遺跡 第 16 地点

所 在 地　平塚市東真土一丁目 220B 外

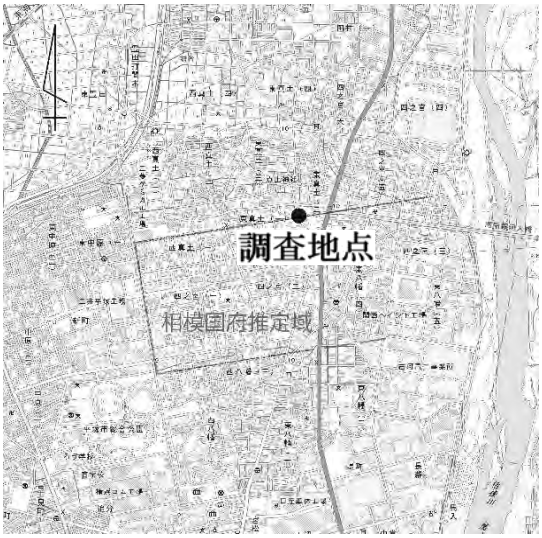
調査期間　令和元年 12 月 17 日～令和２年９月 29 日

調査面積　1,761 ㎡

調査組織　国際文化財株式会社

担 当 者　土　任隆・木田　真

調査概要　調査は県道工事に伴うものです。本遺跡は、平塚市の東部で海岸線に並行して延びる概ね 12 の砂丘列のうち、内陸側から３番目の砂丘列上に立地しています。相模国府推定域の北端付近に位置しており、周辺には多数の遺跡が確認されています。



第１図　遺跡位置図（1/50,000）

縄文時代　縄文時代中期の土器１点、後期の土器２点が出土しました。

古墳時代後期～奈良・平安時代　当該期は本遺跡を特徴づける時期で、竪穴住居址 66 軒、竪穴状遺構 30 軒、掘立柱建物址６棟、溝状遺構 23 条、井戸址 19 基、土坑 128 基、ピット 117 基が検出されました。出土遺物は土師器の坏（つき）及び甕（かめ）を中心に、須恵器（すえき）、灰釉陶器（かいゆう）、緑釉陶器（りょくゆう）、土製品、瓦、石器・石製品、金属製品など、概ね７世紀後半～11 世紀前半のものが出土しました。

竪穴住居址と竪穴状遺構はほぼ調査区全域で検出され、概ね８世紀前半から増加し、８世紀中葉～９世紀初頭に最も多くなります。調査区東側では９世紀に減少し、西側では継続するものの 10 世紀には減少し、11 世紀中葉以降には見られなくなります。これらの遺構からは腰帯の金具である巡方（じゅんほう）等や、ヤリガンナや鉄斧（てっぷ）、刀子（とうす）等の工具、紡錘車（ぼうすいしゃ）等の紡績（ぼうせき）具、銭貨では和同開珎（わどうかいちん）が出土しました。

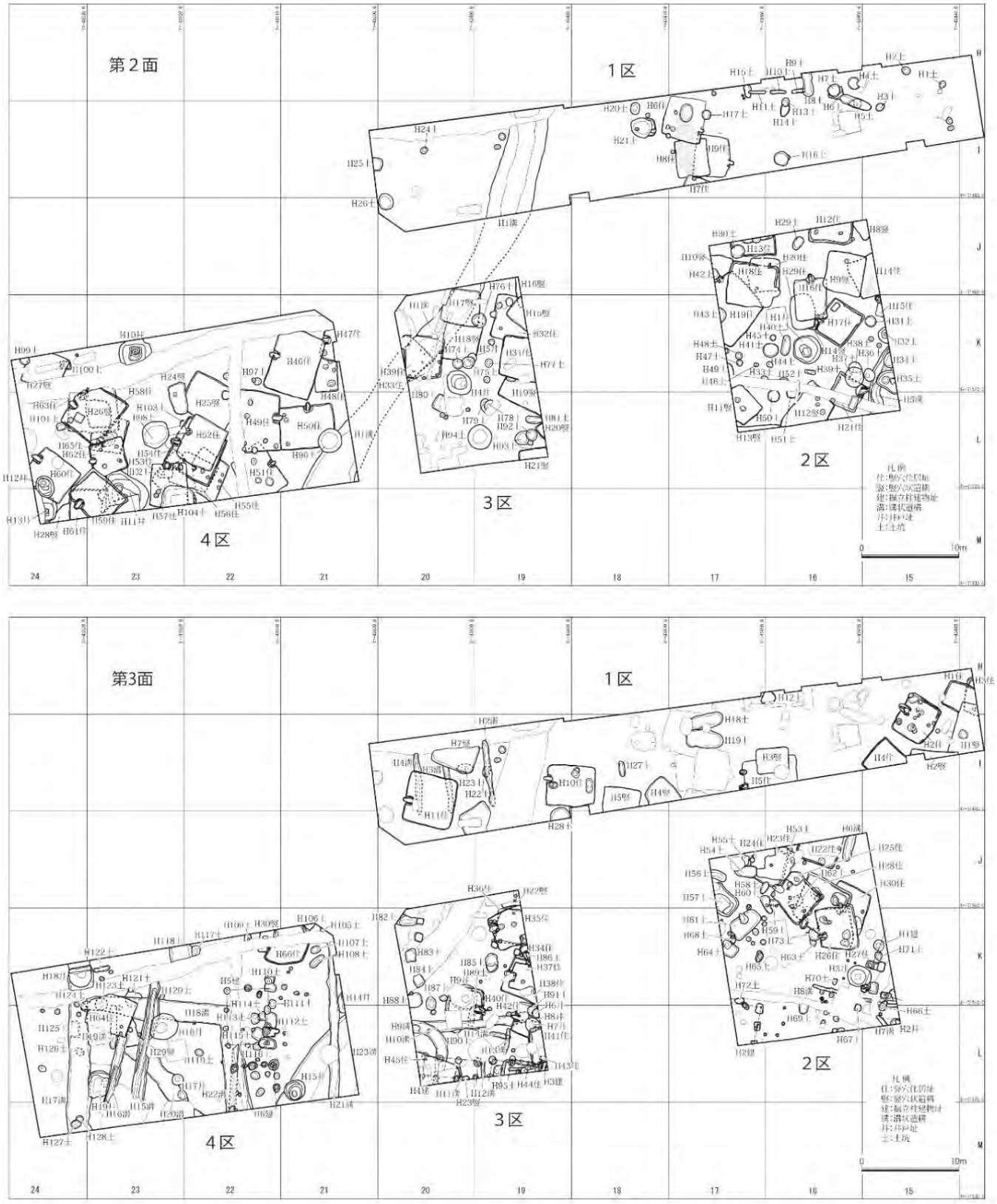
掘立柱建物址は２～４区の南側で検出されました。３区南側で検出された２棟は総柱（そうはしら）で、南側に倉庫群が展開している可能性も考えられます。

竪穴住居址等が廃棄された後には、耕作に伴うとされる円形土坑が見られるようになります。

中世　道状遺構１条、溝状遺構２条、井戸址１基が検出されました。遺構が少なく詳細は判然としませんが、道状遺構や井戸址の存在から、11 世紀中葉以降に竪穴住居址等が見られなくなった後も小規模な集落が存在した可能性が推測されます。

近世以降　畝状遺構５箇所、道状遺構１条、溝状遺構 15 条、土坑 94 基、ピット 62 基などが検出されました。当該期は主に耕作地として利用されていたと推測されます。

まとめ　当地は７世紀後半から８世紀にかけて集落が形成され、８世紀中頃～９世紀初頭に最盛期となり、次第に減少して 11 世紀半ば以降集落は途絶えます。以降、中世・近世を通じて主に耕作地として利用されたと推定されます。（土　任隆）



第２図　古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構分布図

相模川の自然堤防上に形成された弥生～中世の集落の調査

河原口坊中遺跡（かわらぐちぼうじゅう） 第９次調査

所 在 地　海老名市河原口三丁目地内

調査期間　令和元年 10 月 24 日～令和２年 12 月７日

調査面積　600 ㎡（１区 300 ㎡、２区 300 ㎡）

調査組織　株式会社玉川文化財研究所

担 当 者　石川真紀・河合英夫・伊藤貴宏

調査概要　河原口坊中遺跡は、相模川中流域東岸に沿って形成された自然堤防上に立地する遺跡です。第９次調査では、２箇所の調査区を設定しました。

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

近世以降　近代では道状遺構１条、竪穴状遺構１基、井戸址２基など圏央道の建設に伴い移転した宗珪寺（そうけいじ）の旧境内に関連する遺構が発見されました。近世では畝（うね）状遺構６箇所のほか、溝状遺構や土坑などが発見されました。畝は調査区のほぼ全域で確認され、近世では耕作地として利用されていたことが窺えます。溝や土坑には宝永（ほうえい）火山灰の廃棄を目的としたものもありました。

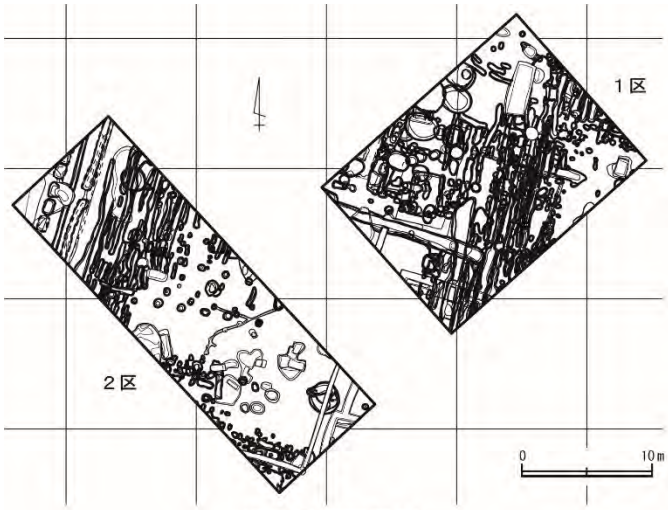
中世　掘立柱建物址６棟、竪穴状遺構５基、耕作に関係する溝状遺構 46 条、井戸址３基、土坑 88 基、ピット 280 基が発見されました。新旧関係では掘立柱建物址が古く、竪穴状遺構や溝状遺構、土坑が新しいことから、中世では居住域から耕作地へと変化していったことが捉えられました。

古墳時代中期～奈良・平安時代　竪穴住居址 54 軒、掘立柱建物址８棟のほか、竪穴状遺構、溝状遺構、土坑、ピットなどが発見されました。竪穴住居址は古墳時代後期のものが多く、掘立柱建物址や土坑、ピットなどは時期的に新しいことが分かっています。遺物は土師器を主体に須恵器、灰釉陶器や緑釉陶器などがみられ、石製模造品（鏡形）など特殊なものもあります。

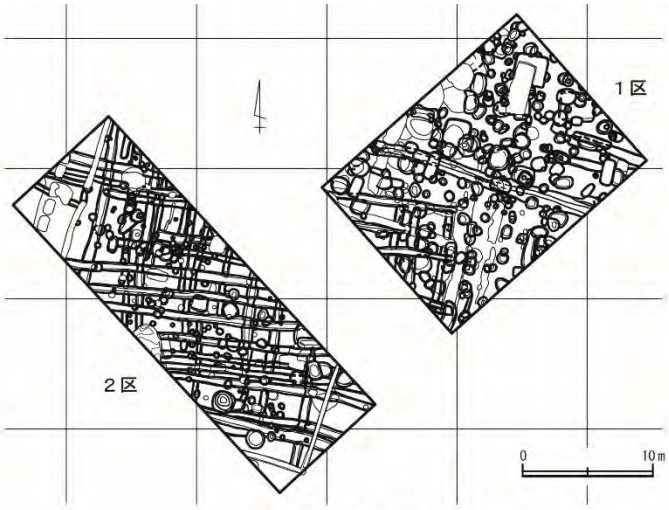
弥生時代後期～古墳時代前期　竪穴住居址５軒、方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）４基のほか、溝状遺構や土坑などが発見されました。方形周溝墓は四隅の一部が途切れる形態のものが特徴的です。土坑には土器棺を埋置するものが２箇所で発見されました。新旧関係では竪穴住居址が最も古く、方形周溝墓、土坑の順に新しいことから、居住域から墓域へと変化していったことが捉えられました。

弥生時代中期　方形周溝墓３基、溝状遺構 12 条のほか、土坑などが検出されました。中期の方形周溝墓は四隅が途切れる形態のものが特徴的です。溝状遺構には方形周溝墓の一部と考えられるものもありました。土坑では土器棺を埋置するものが１箇所で発見されています。

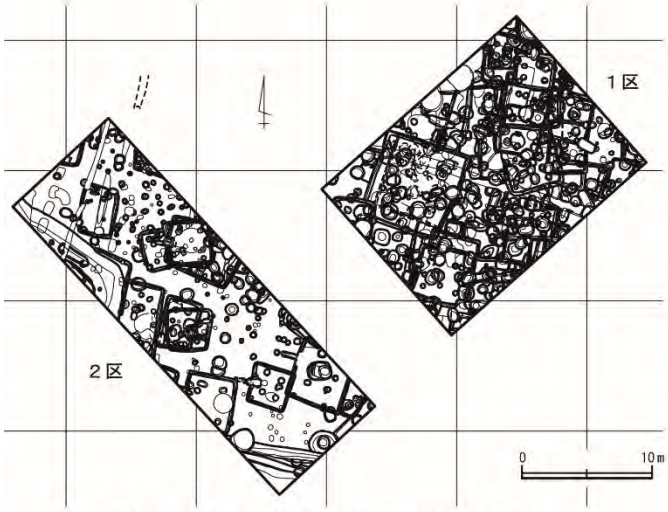
まとめ　今回の調査区では、弥生時代中期から近代以降にかけての遺構・遺物が発見されました。弥生時代では主に墓域、古墳時代後期から中世前半までは居住域としての土地利用が確認できました。中世後半以降は耕作地となり、近代では一部が寺域に転用されたことも明らかとなりました。（石川 真紀）



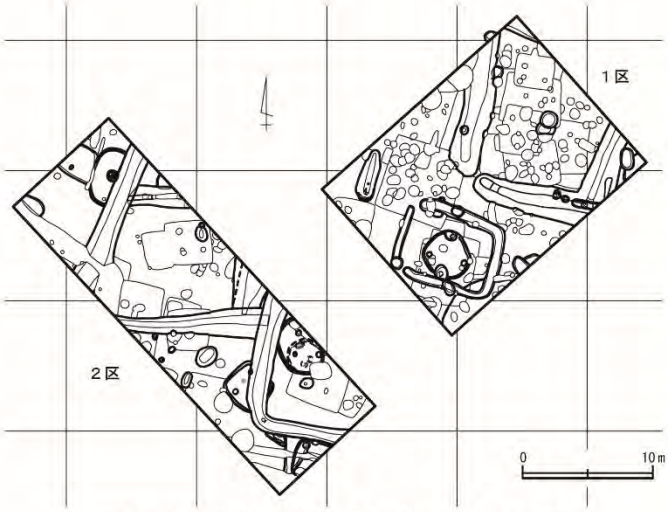
近世遺構配置図



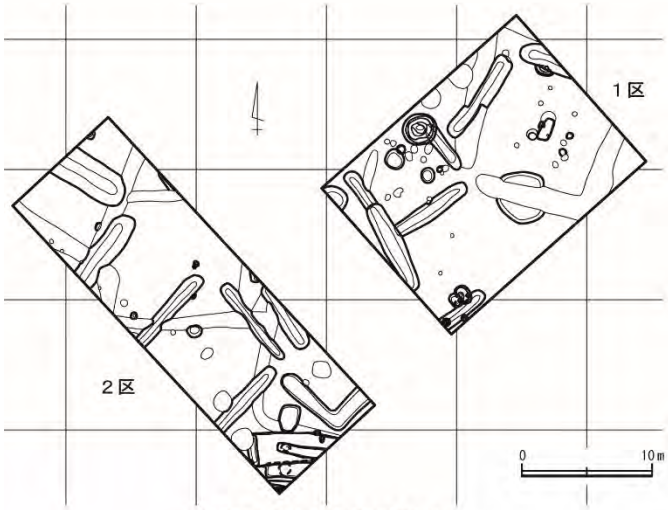
中世遺構配置図



古墳時代中期～奈良・平安時代遺構配置図



弥生時代後期～古墳時代前期遺構配置図



弥生時代中期遺構配置図

Ｙ４号土坑土器棺出土状況（北西から）

久野丘陵斜面地に営まれた集落址の調査

久野山神下遺跡（くのやまがみした） 第Ⅸ地点

所 在 地　小田原市久野 555-5 他

調査期間　令和２年７月 20 日～令和３年２月５日

調査面積　1,274 ㎡

調査組織　株式会社パスコ

担 当 者　酒井　中・相川　薫

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

調査概要　調査地点は、久野丘陵の南東部、山王川に開析された低位段丘の南向き緩斜面に位置しています。当遺跡では、これまでにも複数回の調査が行われており、今回は９回目となります。調査の結果、近世、中世、平安時代、古墳時代後期、弥生時代、縄文時代の遺構と遺物が発見されました。近世の遺構は、溝１条、道状遺構２条、土坑１基、ピット 14 基を検出しました。平安時代の遺構は、竪穴住居址 11 軒、掘立柱建物址１棟、土坑 17 基、ピット 46 基が検出され、９世紀の土師器や須恵器、灰釉陶器、10 世紀後半の緑釉陶器が出土しました。古墳時代後期の遺構は、竪穴住居址５軒、土坑１基が検出されました。弥生時代の遺構は、方形周溝墓５基、土坑墓４基、ピット１基が検出されました。方形周溝墓の埋葬施設は後世の削平により残っていませんでしたが、四隅が切れるタイプの周溝からは弥生時代中期後半に比定される宮ノ台（みやのだい）式土器の壺が出土しました。

まとめ　今回の調査では、３つの遺構面から４時期にわたる遺構群を検出しました。第２面においては平安時代および古墳時代後期の竪穴住居址 16 軒を確認できましたが、出土する遺物の時期が６世紀後半（古墳時代後期）および９世紀（平安時代）に集中するなど、断続的に集落が営まれた様子が見てとれます。恒常的に営まれた拠点的な集落というよりは、人口の増加などをきっかけとして新たな集落が営まれたものの、長期間にわたって定着するには至らなかったと考えるべきなのかもしれません。集落が営まれた時代の前後には方形周溝墓や円形土坑なども検出され、墓域や耕作地としての土地利用のあり方も確認することができました。

最後に、ほとんどの竪穴住居址でカマドが確認されていますが、その多くは廃絶時に人為的に壊されています。竈神（かまどがみ）を鎮めるための行為が行われていたのでしょうか。カマドのなかには、構築材として川原石を使うものが古墳時代後期の住居址で２基、平安時代の住居址で１基確認されています。同時期の石組によるカマドは中部・東海地方において広くみられるものであり、カマドの構造が人の動きを反映したものと見ることもできるのではないでしょうか。（酒井　中）

第２図　久野山神下遺跡第Ⅸ地点遺構配置図

旧石器時代の大量の礫群

新（しん）道（みち）遺跡

所 在 地　大和市上和田地内

調査期間　令和２年７月 13 日～令和３年１月 29 日

調査面積　153.198 ㎡

調査組織　株式会社玉川文化財研究所

担 当 者　小山裕之・中山　豊

調査概要　本遺跡は小田急江ノ島線桜ヶ丘駅の北東約 0.9 ㎞に位置します。地勢的には大和市域南東部の境川を見下ろす相模野台地の東側縁辺に立地し、標高は約 57ｍを測ります。調査区の大半が近代～現代の削平を受けていたため、関東ローム層以下（旧石器時代）の調査となりましたが、大きな成果をあげることが出来ました。

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

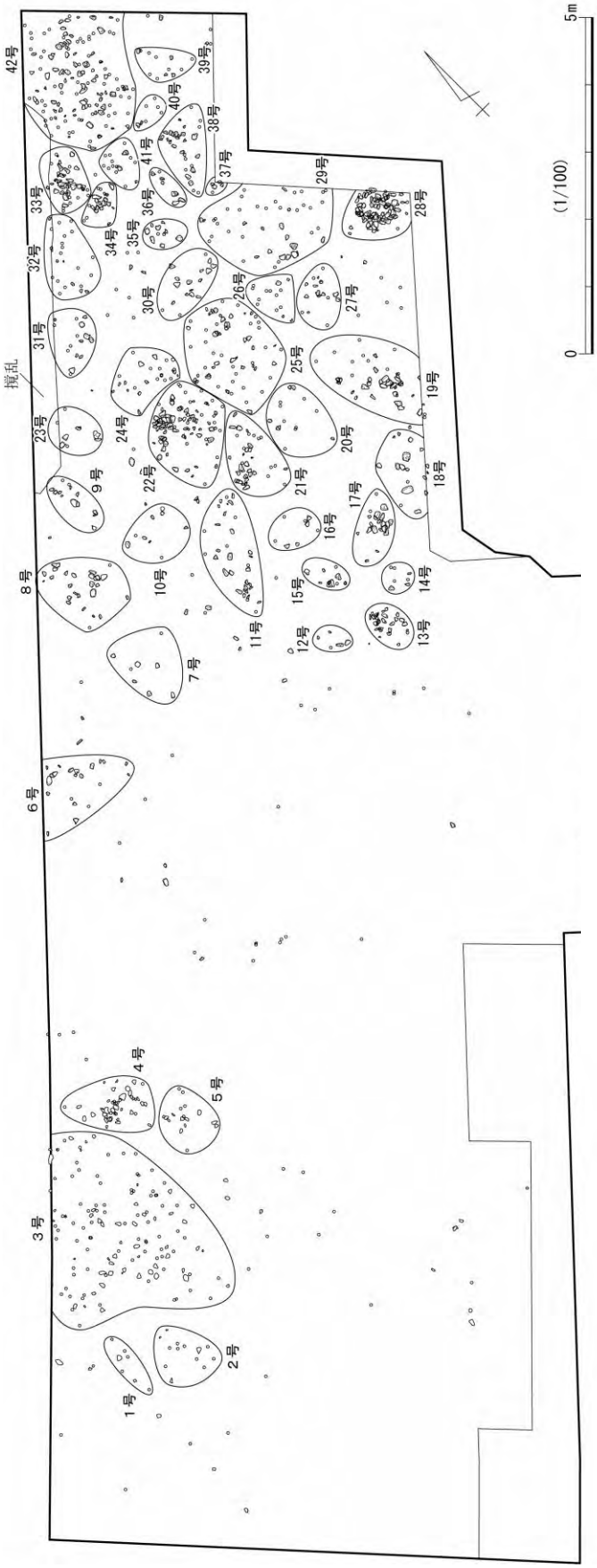
今回の調査で発見された遺物は、石器・礫類が 2,547 点、発見遺構は石器ブロック 13 箇所、礫群 45 基です。石器群はナイフ形石器を始め、スクレイパー、クサビ形石器、磨石、石核、剥片などが見られます。礫は被熱によって赤化して破砕したものが多く認められました。これらは、出土した土層の違いから、３時期の文化層に分けられます。

第Ⅰ文化層－関東ローム層相模野 B1 層上部（約 21,000 年前）に相当します。石器ブロック４箇所、礫群３基が発見されました。遺物の出土点数は石器 351 点、礫 84 点となります。石器は小形のナイフ形石器が多く、石材には黒曜石が用いられることが特徴です。

第Ⅱ文化層－B1 層下部（約 23,000 年前）に相当します。石器ブロック１箇所が発見されました。遺物の出土点数は石器 67 点、礫 18 点となります。石器は第Ⅰ文化層とは異なり、凝灰岩を主体とします。礫群は認められず、３時期の文化層の中では最も希薄な内容となっています。

第Ⅲ文化層－B2U～B2L 層最上部（約 25,500 前）に相当します。石器ブロック８箇所、礫群 42 基が発見されました。遺物の出土点数は石器 701 点、礫 1,326 点となります。石器ブロックと礫群は、台地の縁辺に近い調査区東側と西側の２箇所に大きく分かれ、東側には 37 箇所もの大量の礫群が集中していました（第２図）。この集中度から見ると、繰り返しこの場所で使われていたようです。狭い範囲内からこれほどの礫群が密集するのは、非常に珍しい事例となります。

まとめ－今回の調査では、旧石器時代のナイフ形石器が盛行する３時期の文化層が確認できました。特に第Ⅲ文化層からは、密集度の高い礫群が集中する状況が見られました。各礫群には礫が集められたようなもの、積み上げられたようなもの、散らばったものなどがあり、礫群の集合体のようになっていました。礫群は調査区外への広がりが見られ、今後の発掘調査によりその全貌が判明することが期待されます。（小山　裕之・中山　豊）



第２図　新道遺跡　第Ⅲ文化層の礫群配置図（1/100）

写真１　調査区全景－第Ⅲ文化層（南西から）

写真２　第Ⅲ文化層調査区東部の礫群（南から）

写真３　21・22 号礫群（南西から）

写真４　28 号礫群全景（南西から）

相模国府推定域内で確認された奈良・平安時代遺跡の調査

山王（さんのう）B遺跡 第15地点・七ノ域（ななのいき）遺跡 第11地点

所 在 地　平塚市東真土一丁目・西真土一丁目

調査期間　令和２年11月９日～令和３年６月３日

調査面積　1,327㎡

調査組織　大成エンジニアリング株式会社

担 当 者　宇井義典・板倉歓之

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

調査概要　山王Ｂ遺跡は古墳時代から近世まで、七ノ域遺跡は奈良・平安時代から近世までの遺構が確認されています。県道の工事に係る事前の発掘調査として実施され、現在の平塚市東真土一丁目および西真土一丁目に位置しています（第１図）。山王Ｂ遺跡と七ノ域遺跡は、平塚市を南北に通る八幡愛甲線を境にして遺跡が分かれています。山王Ｂ遺跡は１区と２区、七ノ域遺跡は３区として調査しました。発見された遺構のうち、奈良・平安時代の遺構については次のとおりです。（第２図）

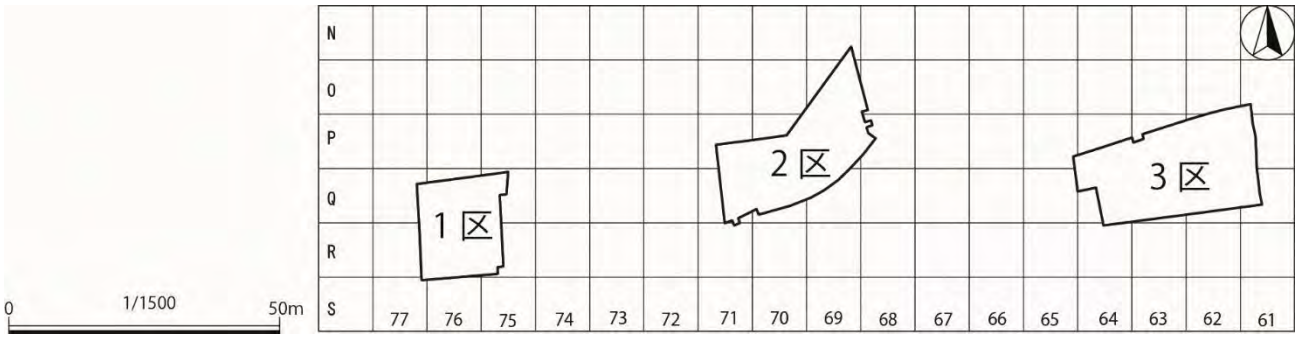
・１区：土坑11基、溝状遺構２条、竪穴建物７棟、掘立柱建物２棟、ピット５基

・２区：土坑13基、溝状遺構11条、竪穴建物１棟、竪穴状遺構２基、掘立柱建物２棟、ピット48基

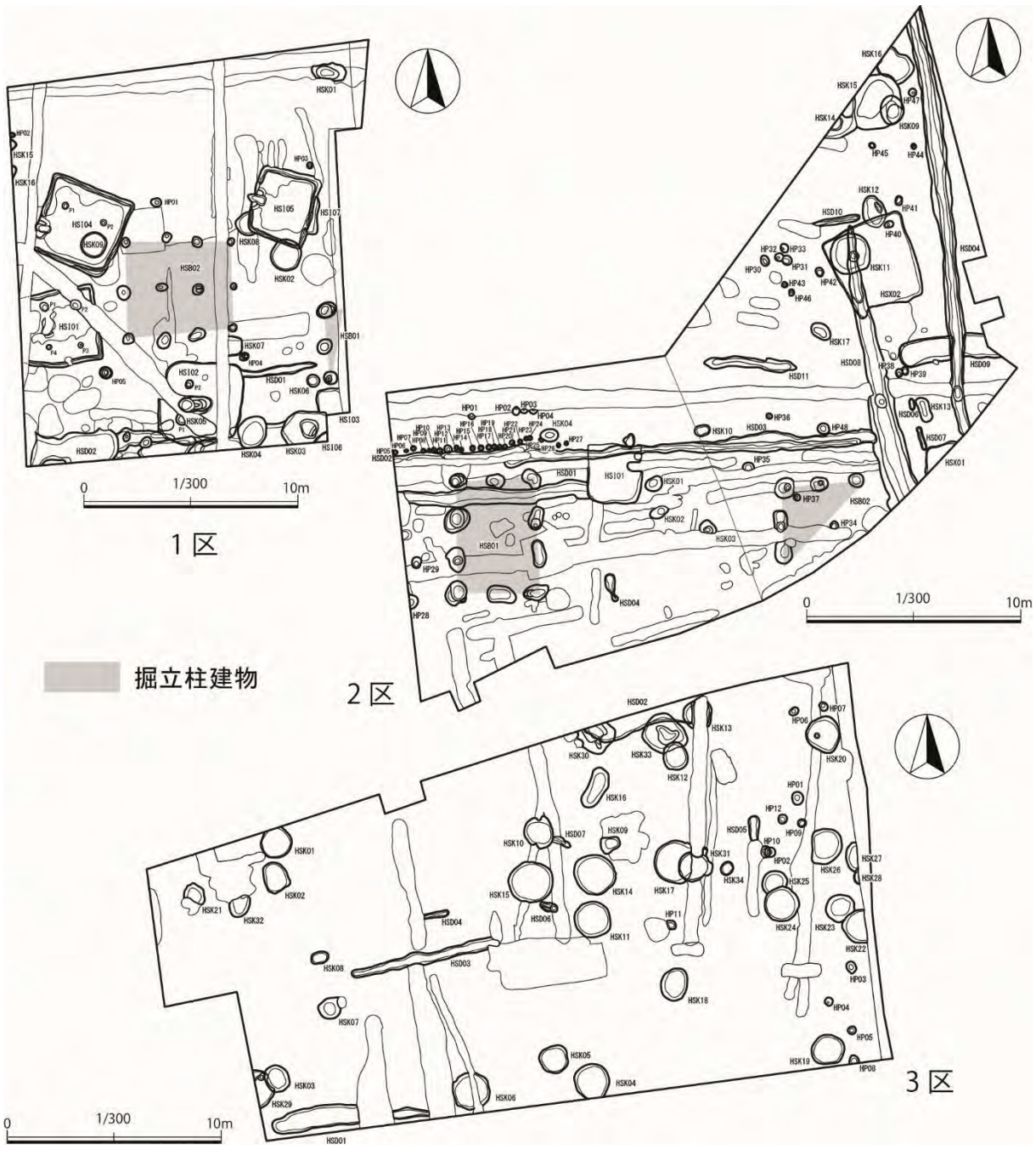
・３区：土坑34基、溝状遺構７条、ピット12基

発掘調査成果のうち奈良・平安時代を中心に紹介します（第３図）。各調査区とも第３面が奈良・平安時代の遺構面に相当し、山王Ｂ遺跡では竪穴建物や掘立柱建物が確認されている一方で、七ノ域遺跡では土坑が多く発見されました。１区では竪穴建物７軒、掘立柱建物２棟が確認されました。竪穴建物は７軒のうち２軒の西壁にカマドが構築されていました。掘立柱建物は総柱でかつ東面に庇（ひさし）を持つものと、柱穴が２間×3間以上のものが見られました。２区では竪穴建物１軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物２棟が発見されました。竪穴建物の北壁でカマドが確認されています。掘立柱建物は柱穴が３間×4間と３間×3間以上のものが見られました。七ノ域遺跡では土坑34基、溝状遺構７条などが発見されました。土坑は直径1～2mの円形土坑が多く見られます。溝状遺構は東西方向が６条、南北方向が１条構築されていました。

まとめ　各遺跡で確認された遺構からは、居住域（集落）が確認された山王Ｂ遺跡と、土坑群が確認された七ノ域遺跡とで土地の利用形態に違いが見て取れます。本遺跡は、相模国府推定域の北辺に位置しており、土地利用の違いがその位置と関係しているのかは、今後、整理作業を進めていく中で明らかになるかもしれません。（宇井　義典）



第２図　１～３区調査区位置図



第３図　奈良・平安時代遺構配置図

相模川の自然堤防上に脈々と営まれ続けた集落の調査

河原口坊中遺跡（かわらぐちぼうじゅう） 第10次調査

所 在 地 海老名市河原口三丁目

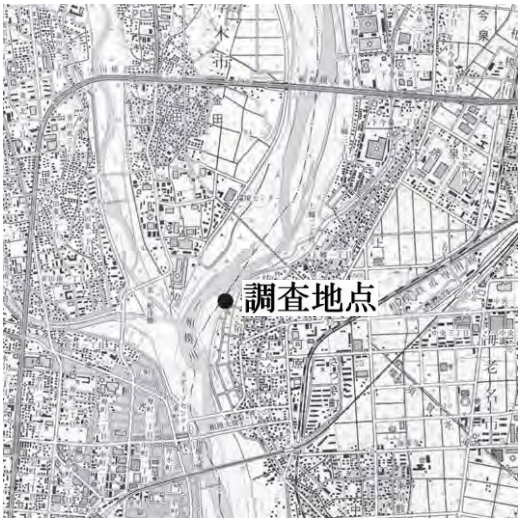
調査期間 令和2年1月 14 日～令和3年1月7日

調査面積 425 ㎡

調査組織 株式会社パスコ

担 当 者 竹内順一・園村維敏

調査概要 本遺跡は小田急線海老名駅から西に 1.4 kmの海老名市河原口三丁目付近に位置し、調査は今回で10回目となります。

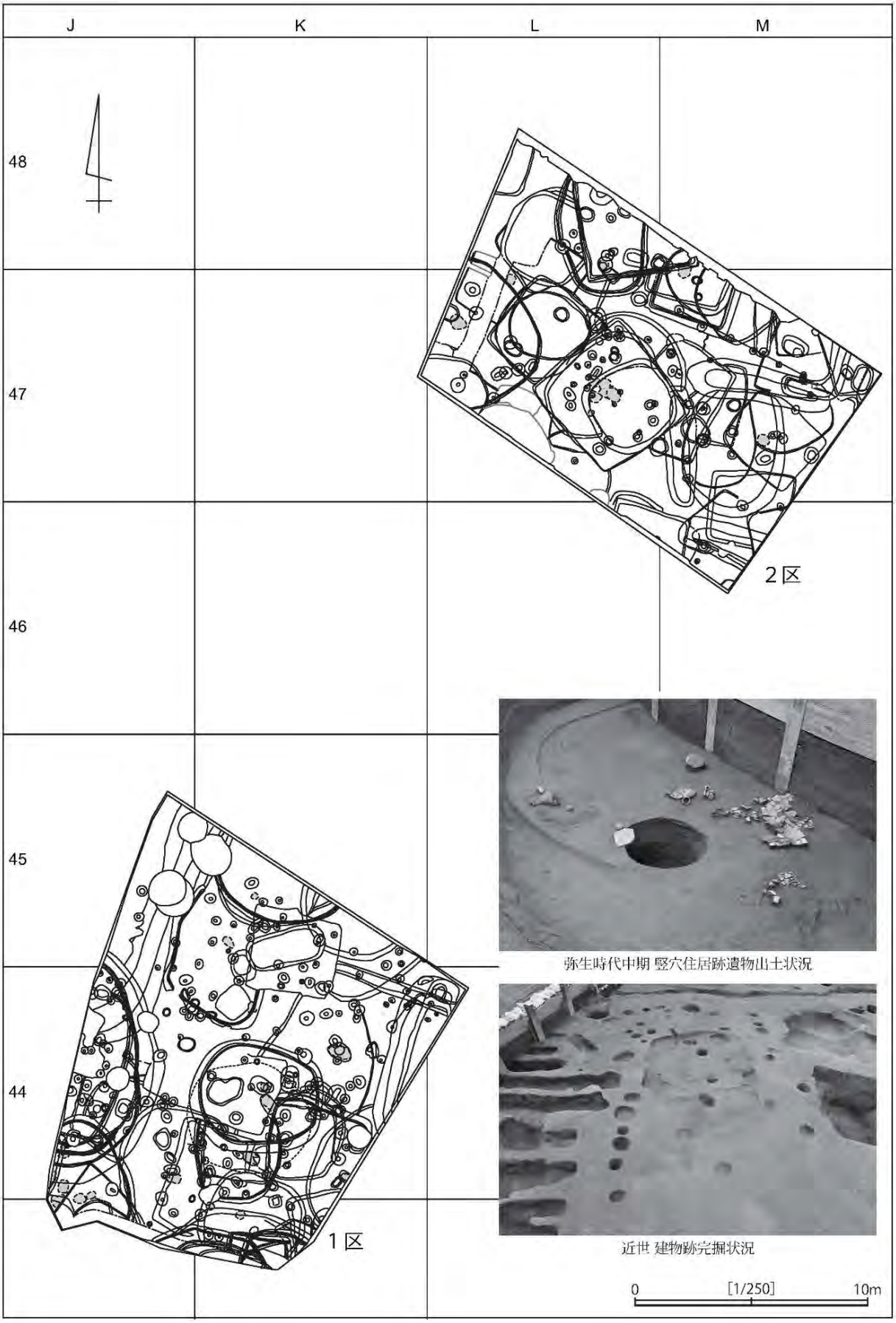


第１図　遺跡位置図（1/50,000）

相模川東岸の沖積微高地に立地し、弥生時代から近世までの遺構・遺物が発見されています。検出された遺構は、近世が掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構3基、土坑 17 基、井戸跡5基、溝状遺構3条、道路状遺構2条、畝状遺構3群、ピット 37 基、中世は掘立柱建物9棟、土坑 28 基、井戸1基、溝状遺構5条、ピット 257 基、古墳時代後期～奈良・平安時代は掘立柱建物2棟、竪穴住居跡 17 軒、土坑 17 基、井戸1基、溝状遺構1条、ピット 68 基、弥生時代後期～古墳時代前期は方形周溝墓3基、土器棺墓2基、遺物集中1箇所、竪穴住居跡 70 軒、土坑 20 基、溝状遺構2条、柵列1条、ピット 68 基などがあります。

遺物は、近世では肥前や瀬戸産の茶碗や徳利などの陶磁器類、キセル、寛永通宝などが出土しています。中世のものは非常に少なく、常滑産陶器、カワラケの破片が出土しました。古墳時代後期～奈良・平安時代では灰釉陶器、須恵器、土師器、鉄鏃など、弥生時代中期～古墳時代前期のものは、土師器、土錘、管玉、磨製石斧、環状石器、青銅品などが出土しています。

まとめ　近世の道路跡は、明治 20 年の迅速測図にも記載されている相模川に通じる道と考えられ、数回の作り替えが認められます。『新編相模国風土記稿』の挿図「渡船場」は、対岸の中津川や小鮎川、渡船場などとの位置関係から、この場所に該当するように思われます。また、掘立柱建物と竪穴状遺構が組み合わさる遺構は馬屋とみられ、多数の井戸の存在などからは、渡し場に付随した宿屋や茶屋などが並んでいたものと推測されます。中世では海老名氏との関連性が想起されますが、今回の調査で発見された遺構との関係は不明です。奈良・平安時代と古墳時代後期は掘立柱建物や竪穴住居跡が中心で、この時代の一般的な集落としてみられるものです。東へ 350m 離れた有鹿（あるか）神社は『延喜式神名帳（しんみょう）』(927 年成立)に記載があることから、10 世紀の前半には存在しており、周囲には竪穴住居跡や掘立柱建物などで構成される集落のあったことがわかります。このように沖積微高地上に集落が営まれる状況は弥生時代から約1000 年間にわたり続きますが、弥生時代中期後半から後期にかけては方形周溝墓や土器棺墓が営まれていることから、墓域が集落に変化したことがわかります。こうして見ると相模川を介した微高地上に集落を営む人々の姿が浮かび上がってきます。（竹内　順一）



第２図　弥生時代中期～古墳時代前期遺構全体図

古墳時代後期の横穴墓と中世のやぐらの調査

川名仲丸遺跡

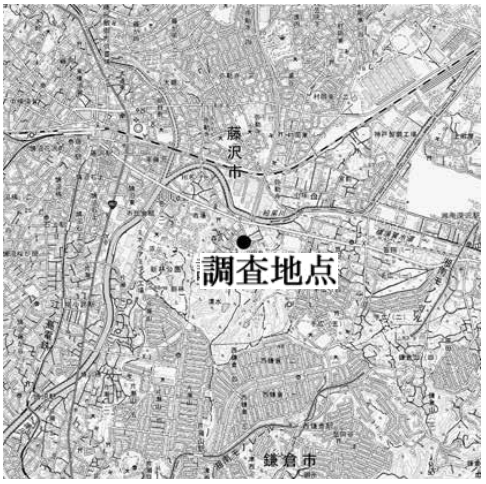
所 在 地　藤沢市川名字仲丸

調査期間　令和３年３月29日～令和３年４月９日

調査面積　220㎡

調査組織　有限会社吾妻考古学研究所

担 当 者　横山太郎・有馬多恵子



第１図　遺跡位置図（1/50,000）

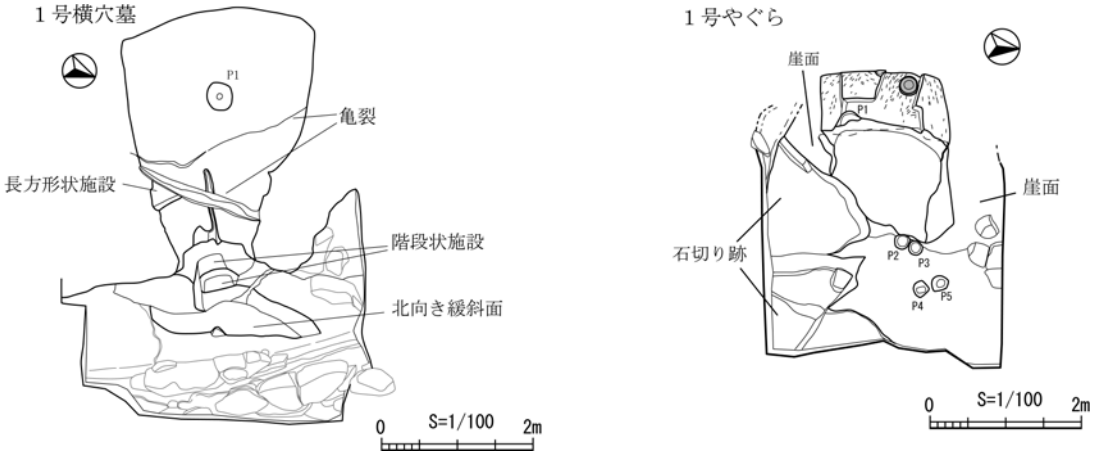
調査概要　本遺跡の所在する藤沢市川名は藤沢市の南東側にあたり、鎌倉市境に接しています。地形としては片瀬丘陵の北縁にあたり、深い支谷が樹枝状に切れ込む複雑な地形をみせています。周辺には西から新林谷・森久谷・清水谷と呼ばれる三つの支谷があり、新林谷・森久谷には古墳時代の横穴墓が、清水谷には横穴墓と中世のやぐらが高い密度で分布しています。本遺跡は清水谷の東側に所在し、川名横穴群Ｆ地点（仲丸右横穴古墳）と呼ばれてきましたが、今回の調査に際し川名仲丸遺跡という名称に改められました。今回の調査では、1968（昭和43）年に測量が行われたＦ地点第一号墳とみられる１号横穴墓と、新たに発見された１号やぐらの２基が対象になりました。

１号横穴墓は標高15.2mの東向き崖面に位置します。長年開口していたため玄室内に遺物などは残っておらず、詳細な時期は不明です。奥壁の高さが1.43m、幅2.55m、残存する奥行きが3.5m程の小規模な横穴墓で、横断面形はアーチ形、平面形は撥形に近く、玄室と羨道の境で側壁にわずかな屈曲がみられる形状から、概ね７世紀中葉～後半頃に造られたと考えられます。

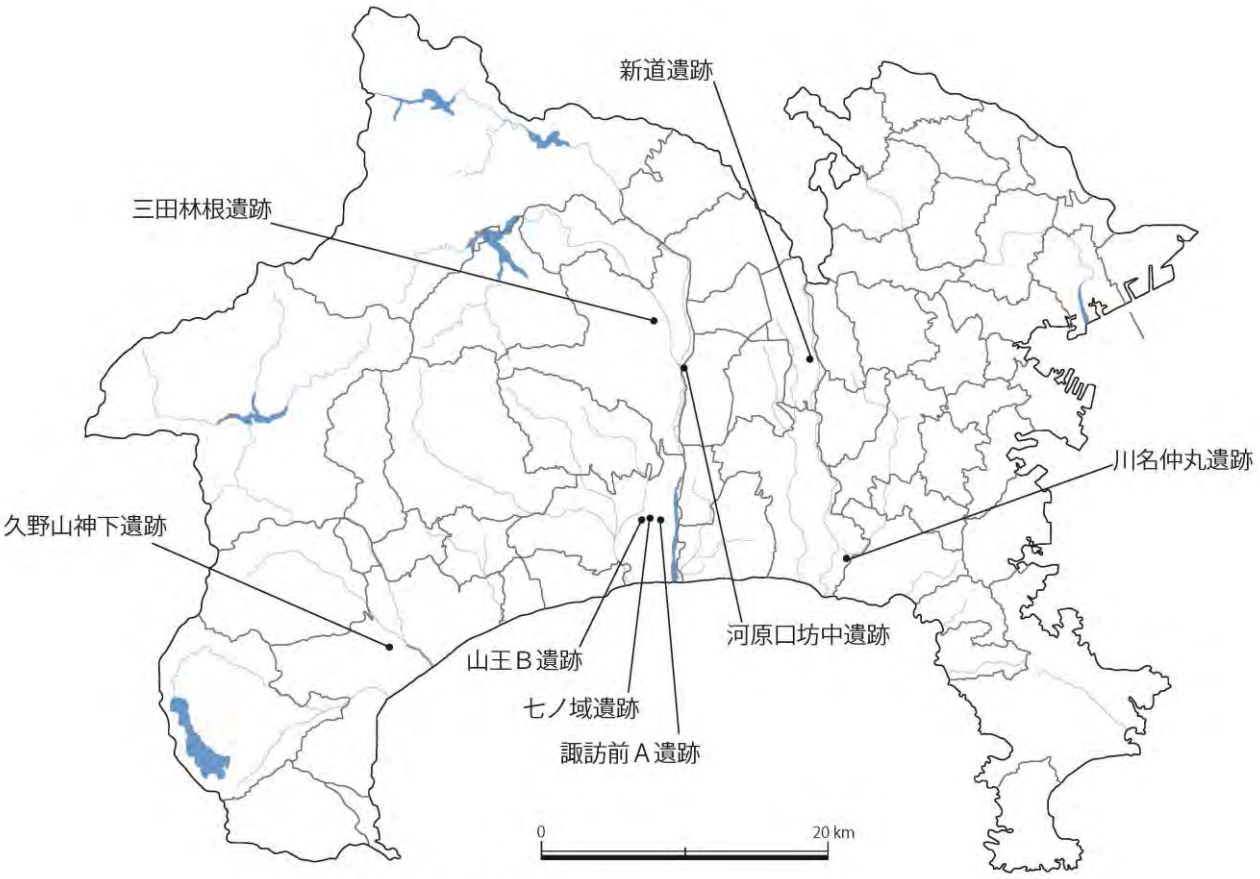
１号やぐらは、１号横穴墓から北側へ27mの東側の崖面に位置し、標高は11.8mでした。後世の石切り等によって大きく削られており、本来の形状をとどめるのは奥壁側の幅1.56m、奥行き0.88mの範囲にすぎませんでした。遺物としては玄室内に五輪塔（ごりんとう）の水輪（すいりん）が２個積まれていました。他に前面の石切り跡に混入した状態で、13世紀頃とみられる常滑（とこなめ）産片口鉢の底部片１点が出土しました。

まとめ　本地域は県内でも有数の横穴墓・やぐらが密集する地域の一つです。周辺での横穴墓の造営はおおよそ６世紀の後半から始まったと考えられており、その背景に渡来系氏族の動きを考察する研究もあります。しかし、当地域の墓域に対応する集落のあり方や、同時期に造営されている高塚古墳との関係は解明が進んでおらず、今後の課題と言えるでしょう。また、中世の納骨窟・供養堂と考えられているやぐらの調査も、今回は断片的な成果にとどまりましたが、このような小規模な調査を積み重ねることによって、地域の歴史を浮かび上がらせていくことに重要な意義があると考えています。（横山 太郎）

第２図　遺構配置図（1/500）



第３図　１号横穴墓・１号やぐら（1/100）



今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う開発事業等に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的にしています。

令和３年度

神奈川県発掘調査成果発表会 2021

発　行　日　令和３（2021）年７月 31 日

編集・発行　神奈川県教育委員会教育局　生涯学習部文化遺産課

中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

〒232-0033　神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1

TEL　045-252-8661　　FAX　045-252-8663